

# えぽっく

八重洲古書館  
RETRO REVALUE RECYCLE

創刊 9 号  
2000年11月30日発行  
中央区八重洲2-1  
八重洲地下街  
TEL033272-2888

## 日本の古本屋

その3

最近『電子ブック』がよく話題になります。古書店にとって影響はありませんか？とマスコミさんから問い合わせもよくあります。

古書店・古本屋と言っても大変幅の広い商売で、古くは聖徳太子の時代の写本から、印刷物としては奈良朝時代の百萬塔陀羅尼から始まり今日の出版物まで全てが含まれるのです。殆どの古書店は、近代の古書店の取り扱われることがなくなることなく、アナログの世界の書物は価値観が増すことでしょう。敢えて言うならば、近年大きく発展してきたリサイクル大型古本店には影響があることでしょう。

皆様も想像してください。文字が無くなると思いますか？印刷という媒体が無くなると思いますか？書物という形体が無くなると思いますか？私たちは『NO』と答えます。22世紀、23世紀、その頃のことは想像すら出来ませんが、21世紀においては・・・。

私たちの店のスタッフは、基本的に『本好き』です。興味あるジャンルは違って、書物に触れていることに魅力を感じているのです。世の中どの様にデジタル化が進もうが、自分の憩いの空間においては、温もりのある書物を手にすることによって幸福感を得るのです。用紙、文字、装幀など、ひとつの芸術品であると思います。感情のある、生きている人間として、ひとつの喜びを与えてくれる『書物の世界』に誘惑されていく方が増えるのではないかと、心密かに想う今日この頃です。より多くの皆様とお話ししながら商いが出来れば大変幸せなことと思います。どうぞ、スタッフにお声をかけてください。

もう師走ですが、来年も宜しく願いいたします。

八重洲古書館店長 渡辺明子  
金井書店八重洲店店長 川上亜衣子  
スタッフ一同

## スタッフのメッセージ

今年二回目の登場となる渡辺です。

前は寒い寒い京都旅行の話を書きました。もう次の冬が到来しています。1年というのは早いものだとつくづく感じます。

最近、土鍋でご飯を炊いています。思っていたほど難しくなく、炊飯器よりおいしく炊けます。沸騰するまでは鍋のそばを離れません。蓋の縁と、蓋の穴(湯気を逃がす穴ですよ)をじっと見つめること約5分。湯気が見えたと思ったら、弱火に落とします。約15分ほど弱火のまま。そして火を落とし10分蒸らして出来上がり。料理嫌いな私でも、おいしいご飯が食べられます。不思議なことに、炊きたてのご飯をしゃもじで返していると、直前に食事を済ませた後でも、おなかが「くくー」と鳴る気がします。あと一膳食べられそうな気がしてきます。(本当に食べたら早弁もおいしいところです。)それほど炊き立てのご飯はおいしい顔をしているということでしょうか。

ご飯の炊き方を覚えたら、お櫃が欲しくなりました。お櫃に入れておけば一日くらいはおいしく食べられると聞きます。でも、無いのです。近くの某Sスーパーには置いていません。近所の日用雑貨店にもありません。寿司桶ならどこでも置いてあるのに、お櫃は無い。確かに、生まれてから今日まで私もお櫃を家で使ったことはありません。生まれた頃から炊飯器があったと記憶しています。きっとスーパーに置いても、1年に何個も売れないのでしょうか。

でも、なんだか淋しい気がしています。私の『日本的食事』のイメージの中には、まだ『お櫃』は生きていたのに・・・。身の回りから、昔からの日本的な物が少しずつ減っているのは残念です。余計にお櫃が欲しくなりました。買って大事に使ってみたい。年を経るにつれ、徐々に『和』の世界に惹かれるようになった気がします。それは古書の仕事に就いたからなのか、それとも単に年齢的なものなのか・・・。

次のチャレンジは、『鰯節』の予定です。自分で削ってお吸い物を作ってみます。

やるぞー！

八重洲古書館店長 渡辺明子

最新情報はインターネットホームページをご覧ください。  
<http://www.kosho.co.jp/>

RETRO = 懐古趣味  
REVALUE = 再評価する  
RECYCLE = 再利用、環流する

八重洲古書館  
RETRO REVALUE RECYCLE



20世紀懐古館

# 大正ロマンモダン挿絵

“大正ロマン”という言葉には、その時代を知らない私にも、どこか懐かしいような気持ちを起こさせてくれる、セピア色の写真の様な印象があります。また“昭和モダン”という言葉は、現在の様々なリバイバルブームに通じる、ほんの少しレトロなイメージでしょうか。それが、青春時代の自分の世界だったり、もしくは両親・祖父母の世界だったり人によって様々でしょうが、今の自分にとってもっとも身近な、生の言葉で伝え聞くことのできる歴史でもあります。今世紀最後の20世紀懐古館は、そういった当時の少年・少女、つまり青春時代の若者たちに絶大な人気を誇った、挿絵画家の世界を、“大正ロマン”の代名詞、『竹久夢二』を中心に集めてみました。

挿絵における黄金期は、その始まりでもある、明治末から昭和の初め頃までを言い、またこの時代は、挿絵の大正期とも云われます。テレビのない時代において、視覚的に楽しめる最大の娯楽は雑誌

であり、現在の雑誌が、生活や時流に密着しており、流行の最先端を担っているのと同じように、当時の雑誌もまた、世俗・流行にその基盤をおいていました。その雑誌を活躍の場とした挿絵画家たちが、瞬く間に人気を博したのも、もっともなことではあります。また、新しい印刷の技術が導入されたことにより、より鮮明な発色と大量印刷を可能としたことも、雑誌が娯楽の王様となった、大きな要因の一つといえるでしょう。

そういった時代において、“大正ロマン”“挿絵画家”の代名詞ともいえる存在だったのが、『竹久夢二』です。詩人でもあった彼の絵は、叙情性に満ち、叙情画とも呼ばれます。彼の他にも、多くの有名な叙情画家はたくさんいますが、それらの絵には、共通してどこかアール・ヌーボーの香りがします。欧米風の顔立ちやモダンな洋装、曲線を多用した処などが、その雰囲気を出しているのでしょう。その中で、現在でも熱狂的なファンが多い夢二の特徴は、憂いを帯びた少女の表情です。美しい着物を着た少女も、洋装で佇む姿も、一様にどこか儂気で、哀愁を漂わせています。夢二がこだわった、少女の悲哀は、彼自身の個性にもなり、雑誌を手にする少女達の感受性を刺激し、羨望をかき立てました。まったくの独学でそれだけの表現力を身につけた夢二の才能は、当時としても抜きん出ていました。しかし、そんな彼に対して、画壇の評価は冷淡を極めました。絵画界の権威である画壇においての評価は、絶対

です。もっとも、独学であるため、多少のデッサンの狂いは当然あったでしょうし、雑誌の挿絵という発表形態そのものが、いわゆる芸術と比較して、軽く扱われていたのでしょう。その為、彼は終生在野に留まらざるをえませんでした。その分、世間や大衆との距離が縮まったのかもしれませんが、私生活での夢二はといつて、なかなか華やかだった様で、幾人もの女性が登場します。そんなたくさんの出会いと別れを繰り返した人生や『竹久夢二』の名前が持つ幽玄な甘さも含めて、現在の私達の描くイメージが出来上がったのです。





夢二の活躍した時代は、先述のとおり 真鍮期ごもり 多くの作家が才能を競った時代です。代表的なところでは、高島華宵・落谷虹児・須藤しげる・加藤まさを・松本かつぢ・中原淳一・藤井千秋などです。彼等の方の多くは、学校や画家の大家のもとで絵画を学んでおり、それぞれが個性溢れる才能を、それぞれの場所で、惜しみなく発揮しました。また、夢二と同じく、叙情画家であり、詩人でもあった人も多く、現在まで愛唱されている童謡の作詞なども手掛けたりしています。

高島華宵は、肉感的で強い意志を感じさせる眼差しの女性を描いています。華宵は、一度として同じ衣裳を描かなかったといわれており、どの絵も全く同じ顔で描くことにより、その姿を強調しました。また、彼の描く少年は、少年独特の色気のようなものがあり、それがまた魅力となっています。晩年は、日本画にも意欲を見せ、6曲1双の屏風に描かれた有名な『移り行く姿』は、圧巻です。落谷虹児は、叙情画の名付け親でもあり、夢二と並ぶ余韻を持った絵を描いています。色調そのものは、全体的にくすんだ感じを好んで描きましたが、夢二の柔らかな絵と比べて、シャープで都会的な印象があります。詩人でもあり、確立された作品世界をもっていました。反対に、須藤しげるや加藤まさを・松本かつぢらの絵は、明るい雰囲気のある絵であり、使われている色も、華やかなものが多いのが特徴です。もちろん、それぞれがまた違った個性をみせており、しげるは素朴で純情な少女や幻想的な雰囲気のもので、まさをの絵はロマンティシズムの中にも知性を感じさせるものですし、童謡『月の砂漠』は、彼の作品でもあります。かつぢは、健康的で明るく無邪気な少女を得意としました。また、

かつぢの妹は、先述の落谷虹児と結婚しています。中原淳一の絵は、なんといってもあの大きくて星をたくさん浮かべた瞳と、洗練された衣裳が印象的です。なかなか多才だったらしく、デザイナーでもあり、『それいゆ』や『ひまわり』など雑誌の出版も手掛けています。また、アンデルセンの訳本の挿絵も多く、藤原千秋とともに、次の少女漫画に続く流れのなかに位置付けられる画家でもあります。藤原千秋は、初期の少女漫画に多大な影響を及ぼしました。フリルやレースを多用したドレス姿の少女などの絵が、池田理代子の『ベルサイユのばら』を彷彿とさせます。

一方で、少年を対象とした雑誌の挿絵に活躍した画家も、多くありました。彼等の絵は、叙情画とは一線を画しており、繊細で優雅な叙情画に比べて、力強く、躍動感に溢れています。剣戟小説の挿絵画家としては、山口将吉郎をはじめ、伊藤彦造・伊藤幾久造・斎藤五百枝などがいましたし、戦争や冒険小説の分野では、樺島勝一・梁川剛一・山川惣治・小松崎茂などが活躍しました。山口将吉郎の緻密で華やかな雰囲気のある絵に対し、伊藤彦造の絵には、どこなく悲壮美が読み取れます。将吉郎は、絢爛豪華で、一世一代の晴れ姿といった場面を良く描いたし、彦造は、死に直面している時の絵を好んで描いているので、その様なイメージがあるのかもしれませんが。彼等のペンを他用した絵に対して、伊藤幾久造は、幼少から浮世絵に親しんできたのが良く分かる、錦絵を彷彿とさせる画風で、斎藤五百枝の、油絵画家を目指していた画風は、コンテによる柔らかな線が特徴でした。戦争や冒険小説といえ、真っ先に名前があがるのが、樺島勝一でしょう。彼は、“船の樺島”と云われる程、細密なペン画による写真の様な船の絵を得意としまし



に、白眉といえる『突如戦艦モノキュラー・オン』は、誰もが一度は目にした事があるのではないのでしょうか。勝一は、戦争ものにもその才能を発揮し、機械好きの少年を魅了してやみませんでした。梁川剛一は、人物の一瞬の動きを捉えて描く画家でした。また、樺島勝一と縁が深い作家です。同じ作品で共に挿絵を担当したこともありますし、剛一の長男と勝一の次女が結婚した事により、姻戚関係でもありました。彼等に共通するのは、作品の劇的な場面を表現するのに長けていた、ということです。山川惣治や小松崎茂は、少し時代の下った、戦後を代表する挿絵画家です。山川惣治は、冒険ものの中でも、ジャングル作品に独自のジャンルを確立しました。様々な動物や、躍動的な少年の姿は、少年達の胸を踊らせます。小松崎茂は、西部劇や空想科学冒険小説、いわゆるSFの世界で名を馳せました。まだ見ぬ世界に憧れる少年にとって、茂の描くアメリカ西部の情景や宇宙の様子が、どれ程の真剣さを持って読まれていたかは、想像に難くないことでしょう。また、彼らは絵物語の世界でも精力的に活動し、それが後の手塚治虫をはじめとする漫画の世界へと発展してゆくこととなります。

挿絵は、絵画の亜流という位置付けが一般的で、あまり重要視されてはいなかったのですが、近年、それも見直されつつあります。今回、随分と駆足での紹介になりましたが、これにより少しでも挿絵の魅力に触れて頂けたなら、挿絵専門の美術館などへ足を運ばれるのも、楽しいことかもしれません。

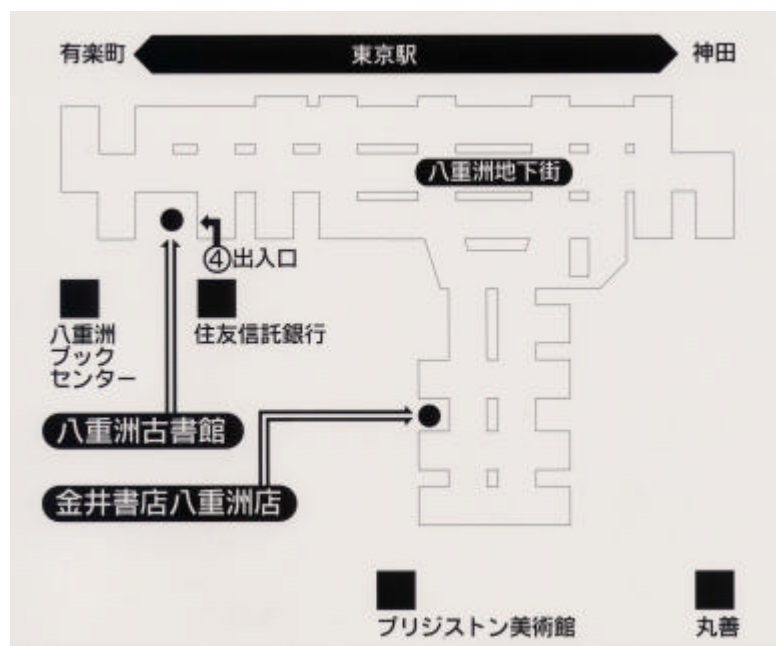
12月になり 周りはすっかりクリスマス一色といった感じがですが、そんな楽しくて賑やかな雰囲気からちょっとだけ離れて、静かななかにも生き生きとした生命感や躍動感のある、穏やかで美しい挿絵画の世界に、遊びに来て頂ければ幸いです。

(文責 :川上亜衣子)



展示場所：金井書店八重洲店 & 八重洲古書館  
開催期間：2000年12月1日(金)～12月30日(土)

読み終えた本、昔の本をお売り下さい



古書 金井書店

TEL & FAX 03-3275-2691  
営業時間 平日 10:00～20:00  
土日祝 11:00～19:00

八重洲古書館 RETRO REVALUE RECYCLE

TEL & FAX 03-3272-2888  
営業時間 10:00～20:00

〒1040028 東京都中央区八重洲2-1 八重洲地下街  
年中無休(元旦のみお休みさせていただきます)

ご意見ご感想ご提案をお待ち申し上げます。  
下記宛にお寄せ下さい。

金井書店営業本部  
〒161-0032 東京都新宿区中落合421-16  
FAX 03-3953-7851

E-mail: office@kosho.co.jp